

赤い熟果生産に適した伏見とうがらし新品種の育成～有望系統の栽培特性評価～

農林水産技術センター 生物資源研究センター 応用研究部 鴨志田 徹也

1 はじめに

京都府産の伏見とうがらしの熟果は、ホテル等の業務需要を中心に取引されているが、既存の品種で熟果を栽培すると、樹勢の低下やしおれ果の発生により出荷量が低下する。そこで、当センターでは、これらの問題点を改善したF₁新品種の育成に取り組んでいる。今年度は、昨年度選抜した新品種候補系統について、熟果の収量や果型等の特性を調査するとともに、過去の調査結果も合わせて評価することにより、有望系統の絞り込みを行ったので、その概要を報告する。

2 新品種候補の栽培特性評価

昨年度選抜した新品種候補2系統（「12-18×3-3」、「12-18×3-33」、以下「3-3」、「3-33」）を土耕無加温ハウスで栽培し、熟果の収量性及び果実品質を調査した。また、令和元年から3年度の調査結果も含めて各系統を比較検討した。

可販果収量及び秀品収量は、「3-3」で最も多く、次いで「3-33」、伏見の順となった（表1）。「3-3」で可販果収量が多くなったのは、主に規格外発生率が低いためと考えられた（表1）。可販果収量の推移について、「3-3」及び「3-33」は伏見と比べて収穫初期となる7月中旬から8月上旬の収量が多かった（図1）。しかし、9月から10月の収量は比較的少なく、時期による収量の変動が大きかった（図1）。

果実の長さ及び幅は、いずれの系統も調査時期によって変動が見られた。同じ時期で比べると、果実の長さは伏見と比べて、「3-33」でやや長い、「3-3」でやや短い傾向が見られた。一方、果実の幅は各系統間における差ははっきりしなかった。また、食味試験において、果実の硬さは「3-3」では伏見と同等であったが、「3-33」では伏見と比べて硬い傾向が見られた。

有望系統の選抜について、以上の結果をもとに、実需者のニーズ（果実が細長い、食感が硬くない）を考慮して検討を行った。果実の長さは伏見と比べてやや短いものの、果実の硬さは伏見並みで、可販果収量が多かった「3-3」を選んだ。

3 今後の展開

令和5年度は、今年度選抜した系統「3-3」について、時期による可販果収量の変動を小さくする栽培管理を検討する。また、「3-3」は果実の長さが伏見と比べてやや短いことから、果実が長く、かつ硬くない系統についても検討を行い、最終的な1系統を決定する予定である。また、令和5年度末に品種登録出願、6年度から現地試験を行う予定である。

表1 F₁伏見とうがらし各系統の熟果の収量調査結果（R4年）

系統	総収量 (kg/a)	可販果収量(kg/a)		規格外収量(kg/a)			規格外 発生率(%)
		秀優良合計	うち秀品	しおれ果	尻腐れ果	その他	
3-3	586.7	335.6	148.3	50.7	127.7	72.7	42.8
3-33	545.4	270.1	125.2	71.8	152.3	51.3	50.5
伏見(対照)	511.4	166.1	61.9	210.5	71.9	62.8	67.5

播種：3月4日、定植：5月2日、調査日：7月7日～11月11日、調査株数：1区5株×3反復
 栽植密度：株間50cm×うね間150cm(133株/a)、4本仕立て

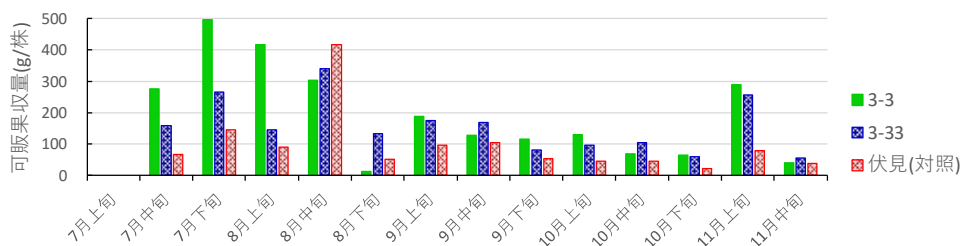


図1 F₁伏見とうがらし各系統の熟果の可販果収量の推移（R4年）